

ゼミ合宿

台湾を再認識の旅

外国語学部 中国語学科 3年 呂 姿儀



「阿宗麵線」台湾のローカルな食べ物西門町にて

私は台湾生まれであるが、台湾に関することはあまりわかつていらない。よく周りの人から台湾に行くならどこかおすすめする場所あるの?とよく聞かれる。あまりわかつていないので、旅行ガイドに書かれているような観光スポットなどし

か紹介できなかつた。台湾人であるのに全く台湾の事わかつてない自分はとても恥ずかしくて、こうした自分を打破したく神奈川大学の中国語学科に入った。入学してから3年目、中国語学科では学科の先生のゼミナール活動に参加しなくてはいけない。私は香港・台湾を研究している村井先生のゼミナールを選び、そんな村井ゼミの夏合宿はちょうど台湾の輔仁大学・マスマディア学科との共同合宿活動を行うために台湾に行つてきた。そこには今まで私が知らない世界が待ち構えていた。

茶畠体験

まず、私の中で未知の世界として行つた場所は台湾の茶文化にも深く関わっている農業だった。農業は朝早く、暑い日や寒い日には関係なく農産物を栽培しているイメージだった私は、台湾の桃園地区にある楓樹村の中の「益寿茗茶」製茶工場の茶畠茶摘み体験をしてきた。早朝5時頃に、茶工



早朝の茶摘み体験

場のオーナーの畠に行き、おいしい茶葉とは何かを教えてもらい、2時間程茶畠で生の茶葉を摘み続けた。同じ作業をずっとしているので、根気よくこの作業をする事で忍耐力が必要である事に気



合宿先の最寄り駅「桃園駅」

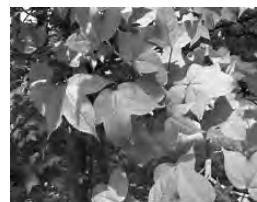
付かされた。またお邪魔した茶烟は自然農法である無農薬を採用しているので、台湾の食不安に感じる消費者に対する安心・健康へのアピールにも繋がっている事で、オーナーがいかに天然に対するこだわりの熱意を大いに感じる事ができた。そして、オーナーは茶道サークルの「雅悦茶集」というグループを招き、日本から来た私たちに台湾茶道を体験させることによつて茶文化を積極的に広めていこうとしていた。

農村・歴史建築地区散策

“桃園”という地名は耳にした事があるが国際空港以外の場所には行ったことがなく、今回の活動で輔仁大学のマスマディア学科がドキュメンタリー題材として農村“楓樹村”を守る土地公、楓樹村のそばにある憲光二村・眷村をスケジュールに組んでいた。



カエデの樹（日本）



楓香樹（台湾）

こうして台湾の農村である“楓樹村”に行くこととなり、現地の農家を招き、地元の住民の人にガイドとし、楓樹村の歴史と変遷について解説してもらつた事で、住民たちの説明や足取りなどを見ていると、この村は彼らにとつても大事な場所であり、“楓樹村”への愛情を感じる事もできた。

“楓樹村”的名前には（カエデ）という漢字が使われているため、楓の樹がたくさん植えているかと思ったら、楓香の樹が植えていた。昔、そこにたくさんの楓香の樹があり、日本統治時代に日本人が楓香の樹を楓の樹と勘違いして、その村に楓に因んだ名前を付けるとなつた。合宿に直前の勉強としては“楓樹村”的歴史について学習した時、この2種類の樹を調べてみた。パツと見た感じでは確かに似ているようにも思えた。

また台湾の人々の信仰対象は様々だ。街中を歩くだけでそれらしい施設にたくさん出会える。大きな都市には立派な孔子廟や小さな村には土地公、海に面している村では媽祖といった地元の神様を祀るための廟が存在している。台湾人の信仰に対する敬虔の念が深い人が多く、日本人の視点から見ると台湾人の宗教観念が強く感じるよう思うかもしれない。

その地域にいる企業や商社の財神、守護神として信じられている。日本で言えば、その地域に存在している神社に祀っている神様に近いかもしれない。

台湾人たちはこの土地公に対して、月に2回決められた日に土地公を祀つてお経を読み、果物や肉などのお供え物を持って、お経を読み、日々の生活の無事を祈るである。

今回訪れた桃園の地では、土地公を祀る最初の地とされている。桃園市政府も土地公に関連する信仰や歴史を後世に伝えるために、市内に「桃園市土地公文化館」を建設し、そしてメディアと融合する事でこの庶民文化を伝承していくことを願っている。

また台湾の人々の信仰対象は様々だ。街中を歩くだけでそれらしい施設にたくさん出会える。大きな都市には立派な孔子廟や小さな村には土地公、海に面している村では媽祖といった地元の神様を祀るための廟が存在している。台湾人の信仰に対する敬虔の念が深い人が多く、日本人の視点から見ると台湾人の宗教観念が強く感じるよう思うかもしれない。

楓樹福德祠

農村にはそれをずっと見守っている神様が存在していると古くから言われていた。その名は「楓樹福德」と呼ばれている神様である。楓樹村には比較的に整った土地公廟が全部で4つがあり、農家の人々たちは小さい時から土地公のご加護の下で育ち、年越しや新年、節句ごとに土地公廟まで参拝に行き、

土地の神様 土地公

台湾では土地公信仰が普及していて、人々の生活の一部にもなっている。民間信仰では、土地公は

一年の収穫を祈っていた。土地公の存在は台湾人である私にとつても身近な存在だった。どこの地区にもいる土地公かもしれないが、この楓樹村に存在している土地公は地域密着していて、参拝客のほぼはここに住んでいる住民であった。またこの地区に残っている土地公に関するエピソードも多く、人々の信仰心は代々に伝わった事でこの場所を守り通したともいえる。土地公の助けが必要な事があれば、参拝して神の意向を伺う事で人々の拠り所にもなっている。いつの時代でもこういった信仰心は変わらないであるし、台湾だけでなく日本にもそういう地域密着の神様が信じられている。



楓樹福德祠

そしてドキュメンタリー撮影のメインと言われている「憲光二村」では眷村（国民党と共に台湾に来た外省人とその家族が居住する地区）と呼ばれる場所が存在していた。「憲光二村」はかつて桃園地区の唯一憲兵宿舎であり、1968年に建てられたという歴史を持つている。そんな場所に現在「移民博物館」の設立を計画しており、桃園市政府も大いに力を入れ、憲光二村で眷村展覧会を開き全国の眷村の人々に参加を呼び掛けている。ここに存在している眷村は一般的な眷舎とは異なつていて、アパート式の職務宿舎も同時に具えている数少ない眷村であった。眷村をモノとして保存する事でただ歴史的建築物を守るだけでなく、一つの観光スポットとして人々に広めたいとも考えていた。

メディア業界の真実

今回合宿のスケジュールを組んでくれたのは輔仁大学のマスマディア学科の方で、マスマディア学科の中でも取材報道を中心勉強している学生たちであったために、合宿を通して多くを学ぶことができた。

台湾のマスマディア学科の学生たちは次から次へと取材しないといけないために自分の都合に組むようなスケジュールよりも相手に合わせスケジュール、そしてその後の編集作業なども想定されるために、全てのスケジュールがすごくタイトになってしまう。ここで私が所属している学科には想定できない現実とジャーナリストの世界はとても忙しいである事を認識させられた。

マスマディアと言つても様々な形があり、カメラを回してドキュメンタリー撮影して映像として情報報を人々に何か伝えるという手もあるが、ラジオ局もその手段の一つである事にこの学科を通して納得させられた。ラジオは声だけで様々な情報を聞いている人に提供しないといけない。ただ、情報報を伝えればいいだけでなく、聞いている側に魅力的な内容をその場で臨機応変に考えないといけないとわかった。それには、たくさん知識や常識も備わっていないとやつていけない仕事でもあったと再認識させられた2つ目のポイント。

体力を鍛えるべし！

最後に、体力な面もとても大事だと感じた。ジャーナリストや報道記者、テレビ局は急に取材が入った時は如何なる時に駆けつけし、人々のために真実を報道や取材するのが仕事である。彼らの体力はおそらく私たちと同じのはずですが、やはり何回もハードな取材経験を積んだ事によって耐える力が強化されたではないかと私は思う。普通の人はハードな仕事を選ぶよりも楽な仕事を選ぶ傾向がある中、マスマディア学科に在籍している学生たちは自分たちの将来の進路をしつかり見つめているだからこそ続けられている。こういった精神力は私たちが学習すべき所でもあると思う。

第三言語で会話しよう

輔仁大学のマスマディア学科と交流し、私を除いた全てのメンバーは日本人だったので彼らが言葉

通じない双方の中、コミュニケーション手段としては世界の共通語である“英語”を使った。流暢な英語ではなく、本当に片言な英単語を繋いで話しあつたりしていた。互いの文化を知るために、それが好きな音楽を教え合つたりなどもしていた。こういった行動を見て、言葉が通じなくともそうした一生懸命な行動で“気持ち”が言葉として交換されお互いを理解し合えさせたにも思えた。中でも台湾人でありながら日本育ちの私は日本人と台湾人がそれぞれ時間に対する感覚と台湾人が時間に対する感覚が全く異なっていた事によって、スケジュールの遅れ等も生じた。日本人は指定された時間通りに動こうとしているが、台湾人は決まっている時間とほぼにつけばよし！多少遅れても大丈夫という人が結構いるように見受けられる。ここで生じる問題の1つとしては、日本人がそういった台湾人を見ておそらく時間にルーズだ！という風に捉えても仕方ないようにも感じる。しかし、逆に台湾人から見れば日本人は真面目すぎるとも思われてしまうのではないかと。アジア地域に住んでいるからといって、皆さんが感じている事や考えている事は異なっているある事を事前に理解しなくてはいけない。それを改めて理解した上、海外に飛び立ついく際に相手を悪く思うではなく、自分と同じ場所で育ったではないので異なる考え方や慣習を持っているのは当たり前と思わないこと。共同合宿の10日間には色々な出来事があったが、合宿が終えた今だからこそ言える事は、全ていい思い出として記憶に留まっている。

日本から海外に出る事で事前予測とは全然違う予測不能、考えさせられる事を出会えた事で自分もより一層成長させられたようになつた。日本のことをわざにもあるように“可愛い子には旅をさせよ”と今となってその言葉の真意が自分を成長させた。

大学4年間はあつという間に過ぎていく、いずれは社会人になつていく。社会人になれば、長いお休みなどもなくなる。だから今は、大学生活しか楽しめない事をいっぱいした方が人生の勝者かもしれない。



茶荘「益寿茗茶製茶工場」での集合写真
(輔仁大学と神奈川大学の学生・先生/茶畠オーナー/ガイド親子)